

佳作

自分の経験から学んだこと

小川町立櫛台中学校 2年

山岸 結奈

私には目の不自由な伯父がいます。私が幼い頃はまだ目が見えていて、よく遊んでくれていましたが、病気によりだんだんと視力が低下し、今では完全に目が見えていない状態です。祖母の家に遊びに行った時、私が使った物を何気なく置いた場所によって、伯父が怪我をしてみたり、元の場所に戻しておかなかったことで、伯父が次に使おうとした時に見つからなくなってしまったことがあります。祖母に注意されたことが何度かありました。目が見えないということは、今ここでなにが起こっているのか、周りがどんな状況なのか、外の様子や目の前に何が置かれているのかなど、さっぱり分からなくて、とても不安になります。でも、幼い頃の私にはそれが分からず、祖母に注意されてもどこか他人事のように感じていたように思います。

私は最近、眼科で瞳孔を開く薬を点眼したときに、二時間程でしたが目の見えない時間を体験しました。近くの文字ですらなんて書いてあるのか分からないくらいにぼやけてしまい、眼科の帰りには一人では歩くことが出来ず、とても怖い思いをしました。こんな数時間のことでこんなに大変なのに、このような状態がずっと続いている人達はどれ程大変な思いをしながら毎日の生活をしているのだろうと考えると胸が少し苦しくなりました。それと同時に、あの時祖母に注意された意味が分かりました。祖母はいつでも伯父が困らないようにと先を読みながら、生活用品を配置する場所を考えています。目が見える自分達が目の見えない人に合わせるのが当たり前だと教えてくれました。

この世の中には、身体が不自由な人が沢山居て、それぞれの人達がそれぞれ工夫しながら少しでも楽に暮らせるようにと頑張っている人達も沢山居ます。私も助けてあげる側になりたいと今、手話教室に通って手話を学んでいます。講師の先生は生まれつき耳が全く聞こえないそうで、助手の人が通訳をしながら教えてくれます。手話は手の動きだけではなく、口の動きや表情からも相手の気持ちを読み取ることが出来ます。目が見えない伯父には言葉以外のコミュニケーションが難しいです。この作文を書くにあたり、伯父にアドバイスをもらいました。伯父は自分の感じていることなどをとても丁寧に教えてくれました。その様子を見ていた母が伯父の楽しそうな顔を久し振りに見たと言っていました。それを聞いて私は、伯父にとって言葉以外のコミュニケーションが難しいのなら、その言葉を使って、これからはもっといっぱい会話をして、伯父の笑顔を沢山見たいと思いました。